11月29日　待降節第一主日　マルコ13章33～37節　神の国への一里塚

今日から待降節が始まります。今日は典礼暦年の最初の日なので、いわば教会のお正月です。しかし、新年をお祝いするわけではありません。主の降誕にむけて、つつしみを持って準備する期間の始まりといえるでしょう。

典礼暦年のＢ年は主にマルコの福音が読まれます。今日の福音の箇所はイエスがエルサレムに上ってから神殿の境内で祭司長や律法学者たちと議論されたあと、神殿を出てオリーブ山に登られました。オリーブ山はエルサレム市街からキドロンの谷をはさんだところにある山で、ちょうど市街と神殿が見渡せます。イエスは神殿のほうを向いて世の終わりについて話されました。その最後の部分です。

「目を覚ましていなさい」というのは世の終わりがいつ来るかわからないから、用意していなさいという意味で言われています。わたしはよく居眠りをするので身につまされますが、弁解をさせていただくと寝ようと思って寝るのではなく気が付いたら寝てしまっています。「不真面目だ」とか「話に集中していない」などと思われますが、午後の会議などは集中しているつもりでも寝てしまいます。ゲッセマネの園でのペトロたちの気持ちがよくわかります。

もちろんここでの教えは四六時中起きていることではなくて、いつも用意していることです。先日の福音に出てきた五人のかしこいおとめたちも寝てしまいましたが、ちゃんと油を用意していたので役目を果たすことができました。それに対して、今日の門番は起きて見張りをしていることが仕事なので、寝てしまっては困ります。そこが大きな違いですね。さらに、門番の人は与えられた仕事をこなせばそれでいいと思っていたのではないでしょうか。もし主人との関係が良好で、主人を尊敬し、帰りを心待ちにしていたとしたら、眠ることはなかったかもしれません。そのように考えると、「目覚めている」とは、「わたしにとってキリストとはどのような方であるか」が問われているのだと思います。

しかし、なぜ待降節に入ったのに終末についての箇所が読まれるのでしょうか。それは、今のわたしたちにとって到来を待つのはふたたび来られるキリストであるからです。待降節は主の降誕を待つ期間ですが、現代のわたしたちは救い主の誕生を待ち望んでいた旧約の民に心を合わせながら王として来られる主を待ち望むのです。その意味で今日の福音は２０２６年の典礼暦から２０２７年へと橋渡しする内容であると言っていいでしょう。

旧約の民は、救い主の到来を心待ちにしていました。とくに、貧しい人々や苦しみを受けている人は、そのような状態からの解放を待ち望んでいました。イエスは神の国をこの世にもたらされましたが、現代も多くの人々が苦しみからの解放を待ち望んでいます。わたしたちはクリスマスを年間行事として迎えるのではなく、神の国に向かうための一里塚として迎えることができるように準備していきましょう。　　（柳本神父）